

感謝されたときの言語表現の違いが向社会的行動促進に 及ぼす影響⁽¹⁾

今 泉 里 香

要 約

本研究は、被援助者に感謝されたときの言語表現の違いが援助者のその後の向社会的行動促進に及ぼす影響を場面シナリオを用いて検討したものである。分析対象となったのは大学生313名（男性125名、女性188名；平均年齢19.98歳、 $SD = 1.61$ ）であった。援助者が感謝されたときの言語表現（ありがとう／ごめんね／感謝なし）と被援助者が置かれた状況（非困惑／困惑）を独立変数とし、向社会的行動を従属変数とした分散分析を行った。その結果、非困惑状況では、「ありがとう」と言われるほうが「ごめんね」と言われるよりも援助者のその後の向社会的行動を促進しやすいことが示唆された。一方、困惑状況では、「ありがとう」と「ごめんね」の違いは援助者のその後の向社会的行動促進に有意差を及ぼさなかった。しかし、両状況とも「ありがとう」が「ごめんね」の得点を下回ることにはなかった。よって、被援助者が困惑している状況では「ごめんね」も感謝の表現として有効であるが、状況を問わず有効な表現は「ありがとう」であることが示唆された。

Key words: ありがとう, ごめんね, 非困惑状況, 困惑状況, 向社会的行動

問題と目的

本研究では、被援助者に感謝されたときの言語表現の違いが援助者のその後の向社会的行動に及ぼす影響について詳細に検討することを目的とする。感謝は、他者の善意によって自己が利益を得ていることを認知することで生じるポジティブな感情的反応（Tsang, 2006）と定義され、well-being との関連、向社会的行動との関連等々、様々な角度から研究がなされている。しかし、そのほとんどは感謝する側に焦点を当てた研究であり、「感謝される」側に焦点を当てた研究は少ない。相川（2016）によれば、感謝感情は相手に伝えることが重要であり、well-being を高めたいならば「感謝される」ことが大切であるという。また、McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson（2001）は感謝されることと向社会的行動との関連に言及し、自己に利益をもたらした人に感謝の意を示すことで、利益をもたらした人が将来的に向社会的行動をとる可能性が高く

なることを示唆している。

では、どのような方法で感謝されるのがよいのか。感謝表明には言語による方法や贈り物による方法など様々な方法がある。しかし、老若男女を問わず、感謝表明の基本は言語による表明である。また、感謝が心理的負担としてではなく肯定的感情として認知されるためには、感謝の言語表現は「ありがとう」が最も適切であろう（相川, 2016, 2022）。だが、日本では感謝の際、ありがとうではなく「すみません」「ごめんなさい」が用いられることが度々ある。そのような負債や謝罪を意味することばで感謝されるとき、感謝は果たして援助者にとって肯定的フィードバックとなり得るのだろうか。感謝されたときの言語表現の違いが向社会的行動促進に影響を及ぼすとするならば、被援助者が感謝のことばを吟味し、意図的に選んで表出することは援助者にとっても社会にとっても有益である可能性がある。

「感謝される」ことと向社会的行動との関連

感謝は道徳的機能（道徳的バロメーター機能・道徳的動機機能・道徳的強化機能）を持つとされ（McCullough et al., 2001）、感謝した人はその後、自身を援助してくれた相手に対して向社会的行動をとりやすくなるほか、見知らぬ他者に対しても向社会的行動をとりやすくなることが実証されている（Bartlett & DeSteno, 2006）。

一方、「感謝される」ことが向社会的行動を促す機能についても、感謝する場合と類似した結果が得られている。例えば、以下の3つの研究は、道案内等をして感謝された（あるいは感謝されなかった、否定的反応をされた）人が、その後、向社会的行動（他者が落としたカバンや本を拾う等）を行うか否かという現場実験による検証である。Moss & Page（1972）と Clark（1975）では、感謝された後には他者への向社会的行動が起りやすくなること、また、感謝されずに否定的な反応をされた場合にはその後の向社会的行動が起りにくくなることが示された。また、Goldman, Seever, & Seever（1982）では、自身の行った道案内に対し、単純な感謝を受ける条件、強い感謝を受ける条件、否定的反応を受ける条件、道案内を頼まれない条件（統制条件）に分けて実験がおこなわれた。分析の結果、感謝される度合いが強くなるほど、その後の他者への向社会的行動が起りやすくなることが示された。

また、上記の3つの先行研究に加え、Grant & Gino（2010）は、なぜ感謝された後には向社会的行動が起りやすくなるのかについて検証した。この研究では、就職活動用カバーレターにフィードバックして感謝された（あるいはされなかった）後で向社会的行動（同じ相手あるいは別の他者からの再依頼に応じる）を行うか否かという実験、大学の資金集め TEL をかける仕事に携わる職員が重役から感謝された（あるいはされなかった）後で向社会的行動（資金集めのための電話量を増やす）を行うか否かという実験が行われた。その際、向社会的行動を促す可能性のある心理変数についても検討された。分析の結果、感謝されないよりも感謝された後のほうが、

同じ相手に対しても別の他者に対しても、その後の向社会的行動が起こりやすくなるということが示された。また、向社会的行動への影響を媒介する心理変数は「Social worth（社会的価値）」である可能性が示唆された。本邦では、蔵永・樋口・福田（2018）が、感謝された後に向社会的行動が起こるまでの心理プロセスについて検証した。この研究では、友人から感謝される（あるいはされない）条件、見知らぬ人から感謝される（あるいはされない）条件に分けて実験がおこなわれ、感謝経験については自由想起法が用いられた。いずれの条件も独立変数は感謝されたとき（あるいはされなかったとき）に生じる可能性のある心理変数、従属変数は向社会的行動の4指標（5件法）であった。分析の結果、両条件とも感謝されないよりも感謝された後のほうが向社会的行動得点が有意に高かった。友人から感謝されたときは、同じ相手・同じ内容の向社会的行動にとどまらず、広く他者一般に対しても向社会的行動一般が促進される可能性が示唆された。一方、見知らぬ人から感謝されたときも、他者一般に対して向社会的行動一般が促進される可能性が示唆された。また、感謝されたときに向社会的行動に影響を与える可能性のある心理変数は、両条件とも「結果への肯定的反応（嬉しさ・行為の正当性・貢献感）」であることが示唆された。これら2つの先行研究からは、感謝されたときに向社会的行動を促す可能性のある心理変数、そしてメカニズムの存在が示唆された。

感謝の言語表現の使い分けと向社会的行動との関連

日本語における感謝の言語表現には特徴がある。日本語の感謝の言語について、佐久間（1983）は「感謝」と「詫び」に、岡本（1992）は『『ありがとう』タイプ（感謝型）』と『『すみません』タイプ（謝罪型）』にそれぞれ大きく2分類している。佐久間（1983）によれば、「ごめんなさい」「すみません」「恐れ入ります」「ありがとう」は詫びから感謝へと心理的かつ連続的につながっている。中でも「ごめんなさい」は、「許しを乞う気持ち」を基底に持つといい、強い「負い」の意識を示唆している。佐久間（1983）は「ごめんなさい」は感謝の表現に用いることはできないとしているが、実際には親しい人間関係の中では用いられており、岡本（1992）は、親しい相手には「すみません」よりも「ごめん（ね）」の頻度が高いことを検証している。また、感謝のことばの使い分けについて、例えば、熊取谷（1991）は、快適状況の生起が人間関係にある種の不均衡をもたらし、その不均衡を修復するための方策として「すみません」が用いられることもあると分析している。しかし、感謝する側の感情がどうであれ、「感謝される」側は発せられた感謝のことばをそのことばどおりの意味に受け取ることとなる（相川, 2016）。それならば、感謝のことばが心理的負担としてではなく肯定的感情と認知されるためには、やはり「ありがとう」を使うのが適切であろう。

感謝と向社会的行動との関連に言語表現の違いを考慮した研究としては、Imai（2022）が挙げられる。実験は、架空の友人が書いた大学の留学志望動機書を読んでフィードバックを提供し、感

謝された（あるいはされなかった）あとで、向社会的行動（同じ架空の友人からの再依頼に応じる）をおこなうか否かというものであった。回答者は感謝条件（Thank you so much! I appreciate it!: 本当にありがとうございます! 感謝しています!）、謝罪条件（I'm sorry to bother you when you are busy!: 忙しいところすみません!）、感謝と謝罪の両方条件（I'm sorry to bother you when you are busy! Thank you so much! I really appreciate it!: 忙しいところすみません! 本当にありがとうございます! 心から感謝しています!）、統制条件（感謝なし）の4条件に分けられた。分析結果は、感謝条件は統制条件よりも有意に向社会的行動を促進することが示された。謝罪条件と両方条件は、統制条件と比較して有意には向社会的行動を促進しないことが示された。つまり、感謝条件、謝罪条件、両方条件の中で、感謝条件が最も向社会的行動を促進する可能性があることが示唆された。

先行研究の問題点

以上、「感謝される」ことと向社会的行動との関連、感謝表現の使い分けと向社会的行動との関連についての先行研究を概観した。しかし、これらの研究には大きく2つの問題点がある。第1に、感謝の言語表現の違いについての検討が不十分な点である。Grant & Gino (2010) は、感謝表現に含まれる微妙な言語的差異が援助者の反応にどのような影響を与えるかについて研究することの必要性を指摘している。日本では、例えば Imai (2022) が感謝言語表現を考慮した心理学的研究を行っている。しかし、謝罪条件のセリフが謝罪を意味することばなのか謝罪を含んだ感謝を意味することばなのかが不明瞭である等、言語表現についてはまだ検討の余地がある。第2に、感謝の生起状況についての検討が不十分な点である。被援助者が困惑しているか否かにより、感謝や負いの程度には違いが生じる可能性がある。例えば、先行研究では道案内をして感謝される状況（Moss & Page, 1972; Goldman et al., 1982）や回答者が自由想起する状況設定（蔵永他, 2018）等がとられている。しかし、道案内は簡易かつ短時間で解決するため、被援助者の困惑は強くない。つまり、被援助者の困惑が強い状況で感謝されることについては十分には検討されていない。また、自由想起法については状況設定に大きな個人差が生じるほか、非言語的感謝が混在している可能性もある。

本研究の目的

これまでの問題点を踏まえ、本研究では、被援助者に感謝されたときの言語表現の違いが援助者のその後の向社会的行動に影響を及ぼすかについて検討することを目的とする。また、その際、被援助者が困惑しているか否かといった感謝の生起状況の違いも加味して検討することとする。

まず、本研究では、場面シナリオの提示により回答者の感謝体験を統一する。また、その際、被援助者が困惑していない状況と困惑している状況の2種類のシナリオを用意する。感謝を表明

してくれる対象については友人とする。感謝を表明する（あるいは表明される）頻度が高いのは友人関係や家族関係である（伊藤, 2014）が、親が不在の回答者や親子関係が好ましくない回答者への倫理的配慮から友人に特定した。感謝表明の方法は、ジェスチャー等の非言語的表現を加えず、言語表現のみに限定する。また、その際、剰余変数となりそうな要素は極力除外する。例えば、長い表現や紛らわしい表現を用いず、シンプルに「ありがとう」「すみません」が持つ影響力を検証する。なお、感謝を表明してくれる対象を友人に特定するため、感謝の謝罪型の言語表現は「すみません」ではなく「ごめんね」（岡本, 1992）を使用する。従属変数は向社会的行動とするが、より詳細な検討をするため、向社会的行動をおこなうか否かの2件法ではなく、蔵永他（2018）の「向社会的行動の4指標」5件法を用いる。

Goldman et al. (1982) によれば、感謝される度合いが強くなるにつれてその後の向社会的行動が起りやすくなること（否定的反応<単純な感謝<強い感謝）が示されている。また、佐久間（1983）によれば、感謝の言語表現は「ごめんなさい<すみません<恐れ入ります<ありがとう」の順に詫び感情から感謝感情へと強くなっていくことが示されている。よって、本研究においても、「感謝なし<ごめんね<ありがとう」と感謝の言語表現の度合いが強くなるにつれて向社会的行動が起りやすくなる可能性は十分にあると考えられる。さらに、被援助者が困惑しているか否かといった感謝の生起状況の違いも加味して検討することでより詳細な結果が得られる可能性がある。

方 法

調査回答者

2022年7月、Google フォームにより大学生316名に質問紙調査を実施した。回答に不備のあった3名分のデータを除外し、313名分のデータを分析対象とした（男性125名、女性188名、平均年齢19.98歳、 $SD = 1.61$ ）。回答者は調査者により、親切行為に対して「ありがとう」と言われる群（以下、「ありがとう群」）、「ごめんね」と言われる群（以下、「ごめんね群」）、感謝のことは言われない群（以下、「感謝なし群」）の3群にあらかじめランダムに振り分けられた。回答者は3群いずれかのQRコードがプリントされた用紙を調査者から受け取り、スマートフォンなどから読みとって回答した。Google フォームの1頁目には、調査目的、回答の任意性、回答時やデータ処理時における個人情報非特定、調査目的限定のデータ使用等を記載した。回答者は年齢・性別を記入後、質問項目の回答へと進んだ。インフォームドコンセントについては、Google フォームへの回答・送信をもって調査への同意を得たものとした。

調査内容

場面想定法における感謝体験場面のシナリオ

本研究では、感謝される場面が描かれた短いシナリオ2種を読み、それぞれ後続く質問（選択式）に答える方法をとった。2種のシナリオは日常よくあると思われる感謝場面を設定した。シナリオ（A）は、特に困っていない友人Aを援助する状況に場面を設定した（以下、「非困惑状況」）。一方、シナリオ（B）は、大変困った状況にある友人Bを援助する状況に場面を設定した（以下、「困惑状況」）。

シナリオの文面は次のとおりであった。非困惑状況シナリオ（A）は、「あなたは友人Aさんをランチに誘いました。会計の際、あなたはAさんの誕生日が近いことを思い出しました。給料（アルバイト料）が入ったばかりだったこともあり、Aさんの食事代を出してあげることになりました。あなたはAさんから『ありがとう』と言われました。」であった。困惑状況シナリオ（B）は、「友人Bさんは、大切なデータの入ったUSBメモリをなくしてしまいました。あなたは、Bさんのために探すのを手伝い、見つけることができました。USBメモリをBさんに渡したところ、あなたはBさんから『ありがとう』と言われました。」であった。なお、シナリオは3群とも同内容であり、感謝されたときの言語表現のみが異なっていた（ありがとう群：「ありがとう」と言われました；ごめんね群：「ごめんね」と言われました；感謝なし群：特に感謝のことばはありませんでした）。

使用変数

向社会的行動の4指標

友人から感謝された（あるいはされなかった）のち、向社会的行動をその後どの程度実行しようと思うかを「向社会的行動の4指標」（蔵永他, 2018）を用いて測定した。なお、蔵永他（2018）は項目に名称をつけていないが、本研究では分析の便宜上、各項目をそれぞれ向社会的行動1, 2, 3, 4と呼ぶこととする。向社会的行動1は同一の相手に対する同一内容（項目：今回と同じようなことを、また今度もAさん/Bさんにしてあげよう）、向社会的行動2は同一の相手に対する向社会的行動一般（項目：今後は、今回のような親切だけでなく、いろいろな親切をAさん/Bさんにしてあげよう）、向社会的行動3は他者一般に対する同一内容（項目：今度、他の人にも同じような親切をしてあげよう）、向社会的行動4は他者一般に対する向社会的行動一般（項目：今回のような親切に限らず、いろいろな人に、いろいろな親切をしていこう）であった。向社会的行動1, 2は「同じ相手」に対する、向社会的行動3, 4は「他者一般」に対する向社会的行動を測定する項目となっている。また、この指標は、向社会的行動1から向社会的行動4にいくほど、同じ相手から他者一般へ、同内容の親切からいろいろな親切へとスケールが広がり、より向社会的になっている。回答者には、シナリオ（A）（B）に書かれている感謝状況を体験し

たと仮定し、その後、向社会的行動 1～4 をどの程度実行しようと思うかを 5 件法（1：全くあてはまらない、2：ややあてはまらない、3：どちらでもない、4：ややあてはまる、5：非常にあてはまる）で回答することを求めた。得点はそれぞれ 5 点満点であり、得点が高いほど向社会的行動をおこなおうとする意識が高いと評価された。

倫理的配慮 本研究は早稲田大学の「人を対象とする倫理審査委員会」にて「倫理審査不要の判断」を受けて実施された（承認番号 2022-HN019）。

結 果

感謝言語表現の違い（ありがとう／ごめんね／感謝なし）および状況の違い（非困惑／困惑）によって向社会的行動 1～4 の平均値に差があるかを検討するため、感謝言語表現（3 水準）と状況（2 水準）を独立変数、向社会的行動 4 得点を従属変数とする 2 要因分散分析（混合計画）を行った（Figure 1）。分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics 27 を使用した。

向社会的行動 1（同一の相手／同一内容）については、感謝言語表現要因および状況要因の交互作用が有意であった（ $F(2, 310) = 7.19, p = .001, \eta_p^2 = .04$ ）。まず、状況要因の各水準における感謝言語表現要因の単純主効果の検定を行ったところ、両水準において有意な単純主効果が認められた（非困惑状況： $F(2, 310) = 108.11, p < .001, \eta_p^2 = .41$ ；困惑状況： $F(2, 310) = 103.33, p < .001, \eta_p^2 = .40$ ）。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、非困惑状況では、感謝なし < ごめんね < ありがとうの順に得点が有意に高かった。困惑状況では、感謝なし < ごめんね = ありがとうという結果となった。次に、感謝言語表現要因の各水準における状況要因の単純主効果の検定を行ったところ、すべての水準において有意な単純主効果が認められ（ありがとう： $F(1, 310) = 7.32, p = .007, \eta_p^2 = .07$ ；ごめんね： $F(1, 310) = 63.27, p < .001, \eta_p^2 = .38$ ；感謝なし： $F(1, 310) = 19.42, p < .001, \eta_p^2 = .16$ ），困惑状況での得点のほうが非困惑状況の得点よりも有

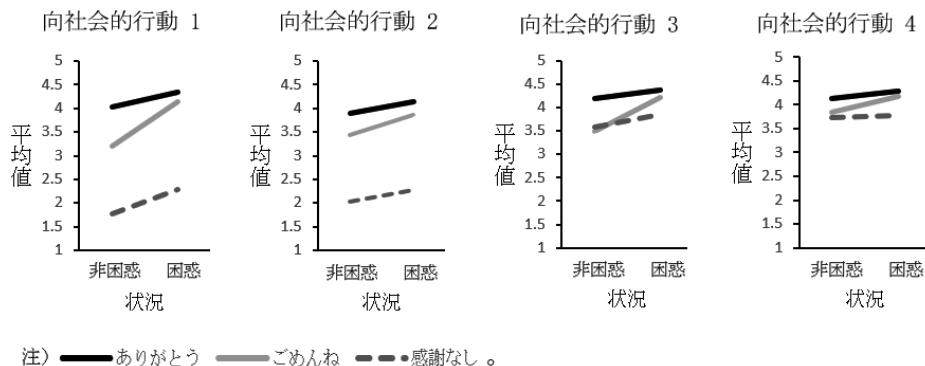


Figure 1 感謝の言語表現の違いと状況の違いによる向社会的行動得点差

意に高かった。

向社会的行動 2（同一の相手／向社会的行動一般）については、感謝言語表現要因および状況要因の主効果のみが有意であり、交互作用は見られなかった（順に $F(2, 310) = 90.28, p < .001, \eta_p^2 = .37$; $F(1, 310) = 28.22, p < .001, \eta_p^2 = .08$; $F(2, 310) = 1.10, n.s.$ ）。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、感謝言語表現は、感謝なし<ごめんね<ありがとうの順に得点が有意に高かった。また、困惑状況での得点のほうが非困惑状況の得点よりも有意に高かった。

向社会的行動 3（他者一般／同一内容）については、感謝言語表現要因および状況要因の交互作用が有意であった（ $F(2, 310) = 8.76, p < .001, \eta_p^2 = .05$ ）。まず、状況要因の各水準における感謝言語表現要因の単純主効果の検定を行ったところ、両水準において有意な単純主効果が認められた（非困惑状況： $F(2, 310) = 13.48, p < .001, \eta_p^2 = .08$ ；困惑状況： $F(2, 310) = 8.10, p < .001, \eta_p^2 = .05$ ）。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、非困惑状況では、感謝なし=ごめんね<ありがとうという結果となった。困惑状況では、感謝なし<ごめんね=ありがとうという結果となった。次に、感謝言語表現要因の各水準における状況要因の単純主効果の検定を行ったところ、ごめんね群と感謝なし群において有意な単純主効果が認められ（ごめんね： $F(1, 310) = 54.88, p < .001, \eta_p^2 = .35$ ；感謝なし： $F(1, 310) = 7.78, p = .006, \eta_p^2 = .07$ ），困惑状況での得点のほうが非困惑状況の得点よりも有意に高かった。

向社会的行動 4（他者一般／向社会的行動一般）については、感謝言語表現要因および状況要因の交互作用が有意であった（ $F(2, 310) = 3.45, p = .033, \eta_p^2 = .02$ ）。まず、状況要因の各水準における感謝言語表現要因の単純主効果の検定を行ったところ、両水準において有意な単純主効果が認められた（非困惑状況： $F(2, 310) = 4.06, p = .018, \eta_p^2 = .03$ ；困惑状況： $F(2, 310) = 7.07, p < .001, \eta_p^2 = .04$ ）。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、非困惑状況では、感謝なし<ありがとう、感謝なし=ごめんね、ごめんね=ありがとう、という結果となり、「ごめんね」と他の水準との間には得点の有意差は見られなかった。困惑状況では、感謝なし<ごめんね=ありがとうという結果となった。次に、感謝言語表現要因の各水準における状況要因の単純主効果の検定を行ったところ、ごめんね群のみ有意な単純主効果が認められ（ $F(1, 310) = 19.06, p < .001, \eta_p^2 = .16$ ），困惑状況での得点のほうが非困惑状況の得点よりも有意に高かった。

考 察

本研究の目的は、被援助者に感謝されたときの言語表現の違いが援助者のその後の向社会的行動促進に影響を及ぼすかについて検討することであった。本研究のシナリオでは、紛らわしい言語表現、また、ジェスチャー等の非言語的表現を用いていないため、感謝の言語表現の違いが向社会的行動に及ぼす影響をダイレクトに測定することができたと考えられる。また、非困惑状況と困惑状況の2状況のシナリオを用意することで、より詳細な分析・検討をすることができたと

考えられる。

本研究結果より、非困惑状況では、「ありがとう」と言われるほうが「ごめんね」と言われるよりも援助者のその後の向社会的行動を促進しやすくなることが示された。一方、困惑状況では、援助者のその後の向社会的行動の促進に「ありがとう」「ごめんね」の違いは関係しないことが明らかになった。つまり、感謝言語表現の違いによる向社会的行動得点差は非困惑状況で生じやすく、困惑状況では生じにくいことが示された。また、非困惑状況では、「ありがとう」のほうが「ごめんね」よりも向社会的行動を促進する一方で、向社会的行動4（他者一般／向社会的行動一般）のような高い向社会性を求められる行動では「ありがとう」群と「ごめんね」群の差は曖昧になった。困惑状況では、「ごめんね」群の得点の有意な上昇により、すべての向社会的行動において「ありがとう」群との差は曖昧になった。しかし、どの状況においても「ありがとう」群の得点が「ごめんね」群の得点を下回ることはなかった。よって、本研究の結果からは、「ごめんね」は困惑状況や高い向社会性を要する状況では有効であるものの、状況を問わず常に効果を発揮するのは「ありがとう」であることが示唆された。

しかし、本研究にはいくつかの課題がある。まず、シナリオの再検討である。本研究では、場面シナリオにおいて交絡要因を完全には排除することができなかった。例えば、金銭的に困っていない友人にたまたまランチをごちそうして感謝されるという非困惑状況では、「ごめんね」を使用されることへの違和感を回答者に生じさせた可能性がある。また、非困惑状況は、その後の向社会的行動3（他者一般／同一内容）をやや想定しにくいシナリオであった可能性もある。困惑状況については、「ごめんね」が感謝ではなく、大切なUSBメモリをなくしたという失敗に対する謝罪として回答者に受け取られた可能性も否定できない。よって、今後はシナリオの再検討が必要である。

2つ目は、困惑状況における「ごめんね」の機能の再検討である。本研究では、困惑状況における感謝の言語表現の違い（ありがとう／ごめんね）は向社会的行動得点に有意差を及ぼさなかった。それは友人からの「ごめんね」が感謝のことばとして肯定的に解釈されたことによるものなのか、それとも他の心理要因や感謝特性によるものなのか、本結果のみでは判断できなかった。よって、他の心理要因や感謝特性の検討を含め、困惑状況での「ごめんね」の機能を再検討することは今後必要となるであろう。また、広い年齢層に向けた調査や、実験室実験を視野に入れた検討も課題である。

謝辞

本研究に際し、ご指導をいただきました早稲田大学文学学術院の小塩真司先生、早稲田大学教育・総合科学学術院の堀 正士先生、ご助言をいただきました公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンターの今津芳恵先生、文教大学の山本琢俣先生に感謝申し上げます。

注

- (1) 本研究は修士論文の一部，日本パーソナリティ心理学会第31会大会（2022）で発表された研究成果の一部について再分析し，加筆・修正したものである。

引用文献

- 相川 充 (2016). 研究所第6回フォーラム「感謝すると well-being は高まるのか？」モチベーション研究：モチベーション研究報告書, 5, 54-67.
- 相川 充 (2022). 「すみません」よりも「ありがとう」にしませんか 朝日新聞 6月2日朝刊
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319-325.
- Clark, R. D. (1975). The effects of reinforcement, punishment and dependency on helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 1, 596-599.
- Goldman, M., Seever, M., & Seever, M. (1982). Social labeling and the foot-in-the-door effect. *Journal of Social Psychology*, 117, 19-23.
- Grant, A. M., & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expressions motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 946-955.
- Imai, T. (2022). Is “thank you” effective even in Japan where “sorry” may be preferred? Toward extending the Find-Remind-and-Bind theory. *Asian Journal of Social Psychology*, 25, 762-772.
- 伊藤 忠弘 (2014). 感謝を感じる経験と感謝される経験における感情 学習院大学文学部研究年報, 61, 99-117.
- 熊取谷 哲夫 (1991). 日本語における「感謝」の談話構造と表現配列——「すみません」と「ありがとう」の場合—— 広島大学日本語教育学科紀要, 1, 61-67.
- 蔵永 瞳・樋口 匡貴・福田 哲也 (2018). 感謝された後に向社会的行動が起こるまでの心理過程 心理学研究, 89, 40-49.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249-266.
- Moss, M. K., & Page, R. A. (1972). Reinforcement and Helping behavior. *Journal of Applied Social Psychology*, 2, 360-371.
- 岡本 真一郎 (1992). 感謝表現の使い分けに関与する要因 (2) —— 「ありがとうタイプ」と「すみませんタイプ」はどのように使い分けられるか—— 愛知学院大学文学部紀要, 22, 35-44.
- 佐久間 勝彦 (1983). 感謝と詫び 話しことばの表現 水谷 修 (編) 講座日本語の表現 3 筑摩書房. pp.54-66.
- Tsang, J. (2006). Gratitude and prosocial behaviour: An experimental test of gratitude. *Cognition & Emotion*, 20, 138-148.